

## ハドソン「超帝国主義」：著者との対話 2

### アメリカの二重基準

アメリカは本質的に、軍事費高騰の結果として、技術投資・設備投資で遅れを取り、産業上の利点を失った。アメリカはその国際的な競争力を失った。

残された唯一の戦略は、残された唯一の力を使って他の国が経済的に独立しないよう支配し、独立傾向を放棄しなければ破壊することである。

そのとき、米国は「私はあなたを支配していない」と言い、善意の第三者で非覇権主義国であるふりをする。「あなたを支配するのは私ではなく、世界銀行であり、IMF であり、国際機関なのだ」というのである。

しかし、それは「二重基準」だ。この二重基準こそが、これらの一見国際的な組織を、本質的に国防総省と国務省の武器に変えたのだ。

### 冷戦は米国の「超黒字」減らしに役立った？

マックス： あなたは「超帝国主義」の本の中で、第二次世界大戦直後の米国にとって、国際収支の問題は「超黒字」であることだったと書いた。

米国は、その後の冷戦を通じてこの問題を解決することができた。冷戦では、海外の輸出市場と世界の通貨の安定を促進するために貿易赤字と財政赤字に陥ったからだ。

このパラドキシカルで、ややレトリカルな表現は、「新しい冷戦を扇動する、衰退しつつある帝国」の歴史的説明として適当だろうか？

ハドソン： 第二次世界大戦の終わりにケインズと米国財務省の間で話し合いが行われた。ヨーロッパ代表としてのケインズは、ドルを事実上金本位に代わるドル本位制度を受け入れた。

アメリカはドルを軍事費としてばらまいた。このドルによって各国経済は回り始めた。

朝鮮戦争は 1950 年から 1951 年まで、米国に膨大な貿易赤字をもたらした。それはすべてドルによって決済されたので他の国々に歓迎された。

新しい通貨制度を作る必要はなくなり、自分たちの経済成長に資金を供給するのに十分なドルを稼ぐことができるようになった。そして、彼らはアメリカの経済軌道にとどまることを選ぶ、従順な衛星国となった。

## 戦後の国際経済システム

ベン： ここでブレトン・ウッズとガットについて、ハドソン氏の評価を補足説明しておきたい。

ハドソン氏は「1920 年代から 1940 年代までのその時期に、米国は世界的な債権者であった」と述べている。しかしハドソン氏の主張はそこではなく、50 年代以降、米国は世界的な債務者から世界的な債務者へと移行したということである。

そしてその理由が、社会主義と共産主義勢力に対して行った戦争にあるという事実だ。

ハドソン： はいそのとおりです。  
しかしそれまでと違うのは、債務の性格だ。冷戦に伴う債務は「支払う必要のない対外債務」だということだ。

ベン： 財務省債の形で。

ハドソン： 国債。ええ、その通りです。

この債務は基本的に軍事費によって生み出される。したがって、アメリカはそのお金を発行することによって他の国を軍事的に支配することができた。

アメリカの借金以外の国の金である。アメリカが国債という形で保有している中央銀行の準備金(ドル)は、借金なのにアメリカ経済のための金銭的準備として計上できる。

そもそも米ドルは、技術的には米国財務省の債務である。これらのドル紙幣または5ドル紙幣または50ドル紙幣は、誰も金によって返済されることを期待していない。

### 返済しなくてもよいのは、それが軍事費だから

ベン：米軍のために、誰も米国に彼らに返済を強制することはできない。

結局のところ、米国がこの世界的な債務者の地位を持つことができる理由は、誰もそれに侵入することができないからである。

ハドソン：最近までそうだった。確かに、米国には返済する金がないから、債務を返済することはできない。他の国はそれを黙って見ているしかない。

しかし中国は立場を変えつつある。彼らはドルという債券を貯める方針を改めつつある。

中国は、為替レートを安定させるために必要なものを除いて、ドルの保有を最小限に抑えたいと判断した。外国為替市場で取引するために必要なもの以外はドルを買うのをやめた。

ロシアもドルを避けるようになった。イランは価値観としてドルを回避している。ベネズエラもドルを避けている。なぜなら、ベネズエラが保持する全財産を、米国は口座封鎖により没収したからだ。

他の国々も米国で金を保有することを恐れている。ドイツでさえ、連邦準備制度に預けている金をドルで引き取り、持ち帰るといい始めている。世界の国々はこう言い始めている。「私たちはもうあなたを信用していません。金を返してください」

誰もがドルを捨てており、誰もドルによる返済を望んでいない。今、返済されないドルを発行するフリーランチシステム全体が終わりつつある。

## 世界銀行と食糧帝国主義

ベン： あなたはいままで「食糧帝国主義」を取り上げている。それによると、国際通貨基金(IMF)、世界銀行の役割は米国の食糧輸出に依存しているとされる。

今回の版では、「米国の食糧帝国主義と新しい国際経済秩序」と呼んでいる。その中身を説明して欲しい。

ハドソン： これは主に世界銀行の選別融資の問題である。

世界銀行は理想的には他の国にドルを稼ぐために融資をすることになっている。それらの国はドルで米国製品を買う。

しかし、過去 80 年間のアメリカの外交の最も中心的な要素は、米国の農産物輸出を促進することだった。世界銀行は、チリ、ベネズエラ、ラテンアメリカに自国の食糧供給を増やすための融資を行わなかった。そして米国の穀物を買うようにさせた。

熱帯の国では、米国では栽培できないパーム油、コーヒー、バナナのみが開発された。プランテーションが促進され、各国はますます食糧を米国に依存するようになった。

米国は革命を起こしたラテンアメリカの諸国を好まない。米国は彼らに制裁を課すつもりであり、これ以上彼らに食糧を輸出するつもりはない。

ホンジュラスのセラヤ大統領が自国の農業を発展させたいと思ったとき、ヒラリー国務長官はすぐにクーデターを起こし、独裁を確立した。

米国は、ホンジュラスが望むことをしなかった場合にホンジュラスを餓死させる事ができると証明してみせた。それは、米国がすべての国で求めてきた種類の食糧絞殺である。

## 事態は米中対立ではなくアメリカの没落にある

マックス： いま、中国との米国の大国競争の重要な側面は、技術を中心に展開している。

あなたは、戦後、米国が食糧だけでなく、軍事製品、特に技術への依存を促進しようとしたと語っている。

しかし今、あなたは米国が 5G で中国に追い抜かれている。米国は、もはや自国の技術への依存を助長することができなくなった。これから米国はどのように逆襲していくのだろうか？

ハドソン： アメリカはもはや、産業のコストに基づいて競争することはできない。今できるのは、他の国々に知財権を請求することくらいだ。しかしテクノロジーセクターは独占を維持できなくなれば終わりだ。

短期的に生きているアメリカは、Facebook や Google などに高額でヒットアンドランの非常に迅速な利益をもたらそうとするが、中国は長期的に見て、実際の技術経済を発展させようとしている。

10 年後、アメリカは中国に、Facebook や Google をもう使わせないという。中国はそれでいいと言う。それで終わりだ。